

# 中間構文の生成に関する諸問題

## Problems with the Derivation of Middle Constructions in English

小 泉 直

Koizumi Naoshi

### 1. はじめに

(1)に示すように、英語には、動詞が本来他動詞でありながら、その目的語が主語として現れるために、一見自動詞であるかのように見える構文がある。

(1) a. The book reads easily/well.

b. Clay tablets decipher with difficulty.

c. Pine saws well.

d. This pipe smokes nicely.

e. Cheap bread dices unevenly. (Fiengo 1980: 49-50)

この構文は形式的に能動態でありながら意味的に受動態であることから、伝統文法では能動受動態と呼ばれてきた(Jespersen (1927)等を参照)。しかし、本稿では生成文法における最近の慣習に倣って、この構文を中間構文(middle construction)と呼ぶことにする。

以下、本稿では、第2節で中間構文の諸特性を考察する。続いて、第3節で、この構文の生成文法における生成方法を概観し、その問題点を検討する。

## 2. 中間構文の諸特性

### 2.1. 動詞

動詞は他動詞のみが許される。

- (2) a. This vinyl floor {lays/\*lies} in a few hours.
- b. These mosquitoes {kill/\*die} only with a special spray.
- c. The engine {lifts/ ?? raises/\*rises} out easily.

(Fellbaum 1986: 2)

精神的活動(mental activity)を表す動詞は一般に許されない。<sup>1</sup>

- (3) a. \*The answer realizes easily.
- b. \*A new car prides easily.
- c. \*Beer wants frequently.
- d. \*Snakes fear easily. (O'Grady 1980: 64)

- (4) a. \*French acquires easily.
- b. \*The arguments assume easily.
- c. \*The answer knows easily.
- e. \*The answer learns easily. (Keyser and Roeper 1984: 383)

- (5) a. \*Crickets {see/watch/hear} on summer evenings
- b. \*His mathematical papers {explain/understand/grasp/learn/comprehend/question/doubt/refuse/(dis)prove/believe} easily. (Fellbaum 1986: 15)

### 2.2. 時制・相

中間構文は総称的解釈を受ける。ここで総称的解釈というのは、時制が普通単純現在で、動詞句が主語の一般的傾向や潜在的性質を述べる場合のことをいう。<sup>2</sup>したがって、中間構文には、(3)に示すように、特定の時を表す副詞は現れない。<sup>3</sup>

- (6) a. ? \*These couches converted easily into beds yesterday

- when John and Mary were here. (O'Grady 1980: 60)
- b. ? Yesterday, the mayor bribed easily, according to the newspaper.
- c. ? At yesterday's house party, the kitchen wall painted easily.  
(Keyser and Roeper 1984: 384)
- d. ? \*Last week, the chickens killed nicely.  
(Roberts 1987: 194)

中間動詞は進行形にならない。<sup>4</sup>

- (7) a. \*Bureaucrats are bribing easily.  
b. \*Chickens are killing nicely. (Roberts 1987: 194)

### 2.3. 動作主(agent)

動作主のNPは表面に現れない。

- (8) a. \*The paint sprayed on evenly by the painter.  
b. \*The car handles easily by any driver.  
(Fellbaum 1986: 2)
- (9) \*Limestone crushes easily by children.  
(Hale and Keyser 1987: 27)

表面に現れない暗黙の動作主は、意味的に非特定のな(nonspecific)解釈を受ける。したがって、(10a)は、必ずしも適切な文とは言えないが、(10b)-(10d)のように書き換えることができる。<sup>5</sup>

- (10) a. This car handles smoothly.  
b. ? People, in general, handle this car smoothly.  
c. ? One handles this car smoothly.  
d. ? This car is handled smoothly by people, in general.  
(Fellbaum 1985: 21)

動作主のNPは不定詞目的節のコントローラーになれない。

- (11) a . \*The pliers adjust to get a firm grip on them.  
 b . \*Our exerciser folds and stands on end to tuck it into a corner.  
 c . \*The dog food cuts like meat to serve it conveniently to your pet. (Fellbaum 1986: 2)

- (12) \*This corn grinds easily to feed the chickens.  
 (Hale and Keyser 1987: 27)

#### 2.4. 被動作主(patient)

中間構文の主語位置に現れるNPは被動作主の意味役割を持つ。<sup>6</sup>

- (14) a . (Instant cereal advertisement:) Prepares in your bowl ... instantly.  
 b . (from a dog kibble advertisement:) ... cuts like meat, chews like meat.  
 c . I think that's silver ... it polishes up like silver.  
 d . A good tent puts up in about two minutes.  
 (van Oosten 1986: 84)

被動作主は人間(human)であってはならない。<sup>7</sup>

- (15) a . \*The boss handles easily.  
 b . \*Babies wash in small plastic tubs. (Fellbaum 1986: 12)  
 (16) a . \*Marines don't intimidate easily.  
 b . \*Yale undergraduates teach well.  
 c . \*FBI agents recognize on the spot. (ibid.: 23)

被動作主のNPは、Fillmore (1968)が主張する被動目的語(affectum object)、つまり、動詞によって表される動作に先立って存在している目的語でなければならず、達成目的語(effectum object)、つまり、動詞の表す動作が完了して初めて存在するに至る目的語であってはならない。

- (17) a . \*These cabinets {construct/build} easily.  
 b . \*Wool sweaters knit easily.  
 c . \*These shoes are manufacturing in Brasil.

(Fellbaum 1986: 17)

van Oosten (1977)は、被動作主の性質が動詞によって表される行為に責任がある場合にのみ中間構文が容認される、と主張している。例えば、van Oostenは、(18)において、

- (18) a . This applesauce will digest rapidly.  
 b . \*This applesauce will eat rapidly.

動詞digestが許されるのは、アップルソースの性質が早く消化するという行為に影響を与える可能性があるからであり、一方、動詞eatが許されないのは、アップルソースの性質が早く食べるという行為に影響を与える可能性がないからであると説明している。また、(19)においても、

- (19) a . The book is selling like hotcakes.  
 b . \*The book is buying like it was going out of style.

動詞sellが許されるのは、本の性質が販売行為に影響を及ぼす可能性があるからであり、一方、動詞buyが許されないのは、購入という行為に影響を及ぼすのがむしろ買い手の方の性質であるからと述べている。\*

## 2.5. 副詞

副詞は被動作主指向のものに限られ、動作主指向のものは許されない。

- (20) a . These chairs fold up {easily/quickly/in a jiffy/\*clumsy/  
 \*competently}.  
 b . Our Japanese cars handle {well/smoothly/easily/\*expertly/\*  
 cautiously/\*carefully}. (Fellbaum 1985: 24)

許される副詞の種類は行為の遂行の難易度を表すものに限られ、その典型はeasily、well、with difficulty等である。ただし、難易度は、次の例

が示すように、間接的に示唆されることもある。

- (21) a . This dog food cuts and chews like meat
- b . This light plugs into any household outlet
- c . Polyester cleans faster than cotton
- d . This umbrella folds up in the pocket (Fellbaum 1985: 26)

副詞は基本的に義務的要素である。

- (22) a . Bureaucrats bribe \*(easily).
- b . Chickens kill \*(easily). (Roberts 1987: 195)

ただし、動詞によって表される行為が主語を特徴づけるのに十分な情報価値を持つのであれば、副詞がなくても容認される。例えば、(23)は容認可能であるが、

- (23) This umbrella folds up (Fellbaum 1985: 23)

これは全ての傘が折りたたみ式というわけではないので、折りたためることが問題の傘を特徴づけるのに十分な情報価値を持つからである。一方、(24)は容認不可能であるが、

- (24) \*This car handles (Fellbaum 1985: 23)

これは現実世界において車は操縦するものという知識がすでに与えられているので、操縦できることが問題の車の特徴づけにおいて何の情報価値も持たないからである。

また、副詞が現れていなくても、否定、法助動詞あるいは動詞への対照強勢が用いられていれば、中間構文として容認される。

- (25) a . This meat doesn't cut (Fellbaum 1986: 9)  
 b . This bread doesn't cut. (Roberts 1987: 195)
- (26) a . The floor might wax. (Roberts 1987: 195)  
 b . This book could sell. (ibid.: 232)
- (27) a . I thought we were out of gas, but the car DRIVES!  
 (Fellbaum 1986: 9)  
 b . The bread DOES cut. (Roberts 1987: 195)

これは、これらの要素も主語を特徴づけるのに十分な情報価値を持つからである。

### 3. 従来の分析

#### 3.1. Keyser and Roeper (1984)の分析

Keyser and Roeper (1984) (以下、K & R) は、中間文も受動文同様に Move- $\alpha$  という統語規則によって生成されると主張している。すなわち、Chomsky (1981)は、受動文に次のような操作が適用されると仮定しているが、

- (28) a . [NP, S] does not receive a  $\theta$ -role.  
 b . [NP, VP] does not receive case within VP, for some choice of NP within VP.

K & R は同じ操作が中間文にも適用されると主張している。この点に関して、例えば、次の D 構造を考えてみよう。

- (29) NP bribe bureaucrats easily.

この構造に(28a)が適用されると、NPはその $\theta$ 役割を失うことになる。また、(28b)が適用されると、bureaucratsは格を持たないことになる。しかし、格フィルターによれば、音声内容を持つ全ての名詞は格を持たなければならないので、(29)の構造はそのままでは不適格となってしまう。そ

ここで、格フィルターの違反を避けるため、bureaucratsはMove- $\alpha$ によってNPの位置に移動し、そこで主格をもらうことになる。その結果、(29)の構造から(30)のような適格なS構造が派生されることになる。

(30) Bureaucrats bribe easily.

### 3.2. Fagan (1988)の反論

K & Rは中間動詞が統語的に他動詞であることを証明するため4つのテストを提示しているが、Fagan (1988)はどのテストも十分な証拠にならないと反論している。例えば、テストの1つである繰り返しのawayについて見てみよう。Williams (1980)は、繰り返しの意味を持つawayは自動詞とのみ共起すると述べている。このため、(31)におけるawayは繰り返しの意味を持つが、(32)におけるawayは方向の意味しか持たない。

(31) a. The dial is spinning away.

b. John is hitting away at Bill.

(32) a. John is spinning the dial away.

b. John is hitting Bill away.

Williamsは、受動文におけるawayが方向の意味しか持たないことから、受動動詞は基底において他動詞であると結論づけている。

(33) The ball was hit t away.

そして、K & Rは繰り返しの意味を持つawayが中間文にも起こらないことから、中間動詞も基底において他動詞であると主張している。

(34) a. \*The bureaucrats bribe t away easily.

b. \*The chickens kill t away easily.

しかしながら、Faganは(34)が非文法的であるのは意味的な理由によると反論している。2.2節で見たように、中間構文は総称的な意味、すなわち、状態を表すが、繰り返しのawayは状態動詞と共起しない。



- (35) a. \*He stank away.  
 b. \*She belonged away.  
 c. \*He feels away for him.

したがって、(34)が非文法的であるのは、繰り返しのawayの意味が中間構文の持つ状態の意味と矛盾するからであると言える。それゆえ、繰り返しのawayに関するテストは中間動詞が基底において他動詞であること示す証拠にはなりえないことになる。

K & R自身が気づいているように、(36)のような前置詞残留に関する現象は彼らの分析にとって反例となる。

- (36) a. John was laughed at.  
 b. ?John laughs at easily.

Chomsky (1981) で提案されている適正統率の定義によれば、(36a)の受動文を生成するために、動詞と前置詞に再分析を適用しなければならない。なぜなら、そのままでは痕跡が動詞によって適正統率されなくなってしまうからである。また、K & Rの仮定によれば、中間文も受動文と同様統語的に生成されるのであるから、(36b)にも当然再分析が適用されてよいことになる。しかし、実際には(36b)は文法性があまり高くない。それどころか、Fagan (1988)は(36b)が完全に非文法的であると主張している。そこで、K & Rはこの問題を回避するために、Move- $\alpha$ の適用環境を中核的なものと例外的なものに分け、後者の環境においてのみ再分析が可能であると提案している。そして、受動変形は両方の環境に適用可能であるが、中間構文形成変形は中核的な環境にしか適用されないと仮定している。しかしながら、Fagan (1988)は、Move- $\alpha$ の適用環境を二分することは理論的根拠が乏しいため、単に事実を記述するための便法にすぎないと反論している。そして、(36)における事実は、逆に、中間文が受動文と同様統語的に派生されるという仮定に対する反例になると批判している。<sup>9</sup>

### 3.3. Fagan (1988)の分析

Fagan (1988)は中間文が統語的ではなく語彙的に生成されると仮定している。Faganは、まず、中間構文の動作主が総称的解釈を持つことを説明するため、(37)の規則を提案している。

(37) Assign *arb* to the external  $\theta$ -role.

ここで*arb*は総称という意味素性を表し、external  $\theta$ -roleは動詞の外項と結びつく意味役割、つまり、動作主を表す。そして、中間構文では動作主のNPが統語的に具現化しないことを保証するため、まず、総称という意味素性を持った意味役割は語彙的に透過される (*lexically saturated*)と仮定し、続いて、Rizzi (1986)による次の提案を採用している。

(38) Categorical structure reflects *lexically unsaturated* thematic structure at all syntactic levels.

(38)の提案に従えば、語彙的に透過された意味役割は統語に投射されないため、中間構文における動作主のNPが統語的に具現化しないとしても、それは投射原理に抵触しないことになる。更に、Faganは、中間構文では動詞の直接目的語と結びつく意味役割が主語位置に現れることを説明するため、(39)の規則を提案している。

(39) Externalize the direct  $\theta$ -role.

この規則は、中間動詞が統語的に自動詞であるという結果を導き出すことになるので、前節で見た前置詞残留に関する受動文と中間文の振る舞いの違いも予測できることになる。

### 3.4. 問題点

中間構文を、K & Rのように統語的に生成しようが、あるいは、Faganのように語彙的に生成しようが、次のような多くの問題が生じることになる。<sup>10</sup> まず、第一に、2.1.節で見たように、中間構文は総称的解釈を持つが、いずれの分析でもこの事実に対してほとんど説明を与えていな

い。K & Rの分析では、中間文が受動文と同じようにMove- $\alpha$ という統語規則によって生成されるのであるから、中間文の意味が受動文の意味と等しくなることが期待される。しかし、変形的受動文は通例出来事を表すので、例えば、中間文とは違って特定の時を表す副詞が現れる。

(40) a. "When is he to be buried? – Oh, don't you know? He has already been buried; he was buried yesterday."

(Jespersen 1927: III. 389)

b. The house was painted last year. (Curme 1931: 443)

しかし、K & Rはこの点について何の言及もしていない。また、Faganも、中間構文が総称時制しか持たないことを保証するために何らかのメカニズムが必要であると述べているだけで、その具体的内容については明らかにしていない。

第二に、2.3.節で見たように、中間構文では動作主のNPが表面に現れることがなく、しかも非特定の解釈が与えられるが、いずれの分析もこの事実に対して満足のいく説明を与えていない。K & Rの分析では、中間文が受動文と同じように統語的に生成されるので、中間文でも受動文と同様に動作主句が随意的に現れても良いという誤った予測をすることになる。

(41) John was hit (by Bill). (Keyser and Roeper 1984: 406)

そこでK & Rは、この問題を回避するために、次のような説明を与えている。まず、Chomsky (1981)の提案に従って、イタリア語の中間構文には動作主句が現れないが、これは動作主の意味役割を持つ接語*si*が代わりに用いられるからであると仮定している。

(42) a. Le mele *si* mangiano.

b. (The apples *si* eat.)

そして、英語の中間構文に動作主句が現れないのも、この構文にイタリ

ア語の接語*si*に相当する物が存在し、これが動作主句の出現を妨げているからであると主張している。ただし、英語では目に見える形で接語が存在しないので、英語の接語はイタリア語の接語と異なり音形を持たないと仮定している。しかしながら、このような説明は、英語にも接語が存在するというを示す独立した証拠が他になければ、その場限りのものにすぎないと思われる。<sup>11</sup>また、Roberts (1987)は、もし英語にもイタリア語の接語*si*に相当する物が存在するならば、副詞類との共起に関してイタリア語と同じ現象が観察されるはずであるが、実際には観察されないと報告している。例えば、イタリア語の接語*si*は動作主指向の副詞や根本理由節と共起できるが、英語の中間構文における動作主はそのような要素と共起できない。

(43) a. I bambini *si* lavano volentieri.

The children *SI* wash-PL willingly.

b. I bambini *si* lavano per far piacere a Maria.

The children *SI* wash-PL to give pleasure to M

(Roberts 1987: 275)

(44) a. \*The bureaucrats bribed voluntarily.

b. \*The slave sold deliberately. (Roberts 1987: 84)

(45) a. \*The books sold [PRO to make money].

b. \*The books sold [PRO to be read].

c. \*The books sold [PRO to read easily]. (ibid.: 111)

したがって、英語にもイタリア語の接語*si*に相当する物が存在するという仮定は理論的にも経験的にも受け入れがたいと言える。一方、Fagan (1988)は、3.3.節で見たように、中間構文では動作主のNPが表面化せず、しかも非特定のな解釈を持つという事実を語彙的透過という過程と(37)の規則によって説明している。しかしながら、語彙的透過という過程

がもともと動詞の目的語のために提案されたものであることと(37)の規則が一般性を持たないことを考えると、Faganの説明もその場限りのものにすぎないと思われる。結局、いずれの分析も事実を説明するために特別なメカニズムを提案している点では同じであり、その意味において十分説明的であるとはいいがたい。

第三に、2.4.節で、中間構文は被動作主の性質が動詞によって表される行為に責任がある場合にのみ許されるということを見たが、いずれの分析もこの事実に対して全く説明を与えていない。

第四に、2.5.節で、中間構文における副詞もしくはそれに準じる要素は主語を特徴づけるものでなければならないということを見たが、いずれの分析もこの事実に対して全く説明を与えていない。

第五に、いずれの分析も与えられた理論内で記述を試みているだけで、なぜ中間構文がこのような形式と意味を持つのか、また、なぜ英語には中間構文という特殊な構文が存在するのか、といったより根本的な問に全く解答を与えていない。

#### 4. おわりに

本稿では、第2節で中間構文の諸特性を考察し、続いて、第3節で生成文法において従来提案されてきた生成方法をKeyser and Roeper (1984)とFagan (1988)の分析に焦点を当てながら批判・検討した。結局、従来の分析が中間構文に対して満足のいく説明を与えられないのは、これらの分析が依拠する文法理論自体が周辺的な構文に対して十分な説明力を持たないためであると思われる。したがって、中間構文に対して真に説明的な分析を与えるためには、周辺的な構文までもその射程に入れた文法理論に依拠する必要がある。

## 注

1. 中間構文で許される動詞の類を規定するため、被動性(affectedness)、動詞の相の特性、他動性(transitivity)といった意味概念が従来提案されてきた (Anderson (1979)、Roberts (1987)、Hale and Keyser (1987)、Tenny (1987)、Wilkins (1988)、Fellbaum and Zribi-Herz (1989)、Fagan (1992)、Taniguchi (1994)等を参照)。しかし、いずれの概念にも多くの問題が存在することから、ここではそれらをいちいち論じることはしない。なお、各概念の問題点についてはKusayama (1997)を参照のこと。

2. 総称的解釈のため、言い換えるならば、出来事を表さないため、中間構文は命令文になることもなければ、知覚動詞の補部の位置に現れることもない。

(i) a. \*Wax floor!

b. \*Translate, Greek!

c. \*Kill, chicken! (Keyser and Roeper 1984: 384)

(ii) a. \*I saw bureaucrats bribe easily.

b. \*I saw the floor wax easily.

c. \*I saw chickens kill quickly. (ibid.: 386)

この点で中間動詞は状態動詞に似ていると言える。

(iii) \*Know the answer, John! (Keyser and Roeper 1984: 385)

(iv) \*I saw John resemble his father. (Fagan 1988: 187)

3. Fellbaum (1986: 4)は、次の例を挙げ、中間構文は過去における特定の行為を表すことがあると述べている。

(i) a. The steak you bought yesterday cut like butter

b. The paint we were persuaded to buy sprayed on evenly

しかし、(i)の主節には特定の時を表す副詞が含まれていないので、これらの中間文が、特定の出来事を表しているのか、それとも(ii)のように一定の期間に渡る出来事を表しているのかははっきりしない。

(ii) a. The tripod used to extend easily (now it jams)

b. Red wine spots used to wash out easily (before synthetics came into wide use)

4. (i)と(ii)に見るように、中間動詞が進行形になることが全くないわけではない。

(i) a. Bureaucrats are bribing more than ever in Regan's second team.

b. Books on word-processing are selling more and more these days. (Roberts 1987: 257)

(ii) This manuscript is reading better every day. (Fagan 1988: 182)

しかし、Roberts (1987)とFagan (1988, 1992)が述べているように、これらの例はある状態から別の状態への漸次的変化を表しているのであって、動作の進行という意味は表さない。次の例についても同様の説明が当てはまると思われる。

(iii) a. Her latest novel is selling like hotcakes

b. The truck is handling smoothly (Fellbaum 1986: 4)

5. ただし、次の例のように、文脈によっては特定の解釈が可能な場合もある。

(i) a. The car handles smoothly when Sophy drives it.

b. Odes to herself write easily when she's in a narcissistic mood. (Rosta 1995: 127)

6. しかし、(i)のように他の意味役割を持つこともある。

(i) a. (Sign on a cake pan:) Aluminum bakes higher, browns

more evenly, because it conducts the heat just right.

b. This music dances better than the other one [i.e., piece of music]

... We'll just have to see how the other piece dances.

c. It chops, it slices, it dices! Call now ... operators standing by. (van Oosten 1986: 84)

これらの例における主語NPは、(ii)の書き換えから分かるように、場所や道具といった意味役割、あるいは、to前置詞句によって表されるべき意味役割を持っている。

(ii) a. In aluminum cake pans, you can bake higher cakes that are browned evenly.

b. You can dance better to this music than you can to the other piece.

... We'll just have to see how well one can dance to the other piece of music.

c. With this appliance you can chop, slice or dice [vegetables].

しかし、本稿では、中間構文におけるほとんどの主語NPが被動作主の意味役割をもつことから、(i)の中間文を周辺的な事例と見なし、考察の対象から除外する。また、類例に関してはRosta (1995: 129-130)も参照のこと。

7. Fellbaum (1986: 23, note 3)は、Keyer and Roeper (1984)の挙げている(i)の例が多くネイティブ・スピーカーによって容認されないと述べている。

(i) Bureaucrats bribe easily.

また、(ii)の例はいずれも中間構文の例として挙げられているが、(ii a)



は副詞wellもしくはbadlyを伴う定型表現であり、一方、(iib)では使われている動詞が自動詞の可能性がある。

(ii) a . Mary photographs well.

(Fellbaum and Zribi-Hertz 1989: 28)

b . She interviewed well.

(Rosta 1995: 132)

8. しかし、責任(responsibility)という概念に全く問題がないわけではない。この点に関して、van Oosten (1977)が責任の所在を決定するのに有効であると主張する次のような質疑応答テストを考えてみよう。

(i) How did Alex manage to buy the Jaguar ?

(ii) a . He quit school, got a job, pooled all his resources, sold his books, moved into a cheap apartment, got a roommate, pawned his guitar ....

b . It's a great car, a real bargain.

van Oostenは、(ii a)は買い手の性質について述べているので、(i)の質問の答となりうるが、(ii b)は購入された物の性質について述べているので、答としては不適切である、と説明している。これに対して、動詞sellの場合は、(iii)と(iv)の質疑応答から分かるように、売られる物の性質だけでなく売り手の性質も販売行為に影響を与える。

(iii) How did Marie manage to sell the car ?

(iv) a . She's taken three Dale Carnegie courses and could sell anybody anything.

b . It's a great car, a real bargain.

したがって、動詞buyの場合は買うという行為の責任が買い手側にあると言うことができ、また、動詞sellの場合は買うという行為の責任が売り手と売る物の両方にあるとすることができる(ただし、主要な責任は後者にある)。

しかし、Kusayama (1997)は、質疑応答テストが動詞learnの場合有効に働かないと反論している。この点に関して次の質疑応答を見てみよう。

(v) How did Alex manage to learn such a long song ?

(vi) a. He repeated it day and night.

b. It contains no difficult words and the melody is so familiar.

(vi)では、学ばれる物も(v)の質問に対する適切な答となっている。したがって、学ばれる物も学ぶという行為に対して責任があることになる。そうすると、学ばれる物も中間構文の主語として容認されるはずである。だが、実際には容認されない。

(vii) \*This song learns easily.

しかしながら、(vi)が適切な答であることに関しては別な理由も考えられる。例えば、次の例を考えてみよう。

(viii) How did Alex manage to buy the car ?

(ix) It was cheap.

Fagan (1992: 77)は、(viii)の質問に対する直接的な答でなければ(ix)は容認されると論じている。つまり、(ix)は、車が安いために購入する手段を講ずることができたという意味で使われているのであれば、可能な答になりうると述べている。したがって、もし似たような説明が(vib)に当てはまるのであれば、(vib)は反例ではなくなるかもしれない。

Kusayama (1997)は、また、質疑応答テストが二重目的語動詞の場合にもうまく働かないと指摘している。この点に関してはFagan (1992: 79)の挙げる次の質疑応答を考えてみよう。

(x) How did Suzanne manage to give her nephew some money ?

(xi) a. She used his birthday as an excuse.

b. He didn't resist.

(xi)では、与えられる人も(x)の質問に対する適切な答となる。したがっ

て、与えられる人も与えるという行為に対して責任があるということになる。そうすると、与えられる人も中間構文の主語として容認されるはずである。だが、事実はそうではない。

(xii) \*Victims of natural disasters give (money) easily.

しかしながら、(xii)が容認されないことも別の観点から説明できるかもしれない。Fagan (1992)は、二重目的語動詞が中間構文に現れないのは焦点の衝突が起こるからではないかと説明している。中間構文を使う目的は主語の特性を記述することにあるが、二重目的語動詞から作られる中間構文では二つ目の目的語が人の注意を主語からそらせる働きをする。その結果、責任の所在があやふやになるり、容認可能性が落ちることになるというわけである。もしこの説明が正しければ、二重目的語動詞からは一般に中間構文が作りにくいことになる。

9. 結果句は動詞の直接目的語を叙述できるが、主語や前置詞の目的語は叙述できないということが知られている(Levin and Rappaport Hovav (1995)を参照)。それゆえ、非能格構文は結果句を取れない。

- (i) a. \*We yelled hoarse.
- b. \*My mistress grumbled calm.
- c. \*The officers laugh helpless.

(Levin and Rappaport Hovav 1995: 36)

しかし、中間構文は、非対格構文と同様、結果句を取ることができる。

- (ii) a. New seedlings water t flat (easily).
- b. Those cookies break t into pieces (easily).
- c. My socks won't scrub t clean (easily).
- d. Permanent press napkins iron t flat (easily).

(Carrier and Randall 1992: 191)

- (iii) This metal hammers flat easily.

(Hoekstra and Roberts 1993: 197)

- (iv) a . The river froze solid.
- b . The prisoners froze to death.
- c . The bottle broke open.

(Levin and Rappaport Hovav 1995: 39)

非対格性の仮説(Unaccusative Hypothesis)に基づくならば、(ii)と(iii)の例は中間構文にも、非対格構文と同様、NP移動が関わっていることを支持する証拠になるかもしれない。

10. 中間構文が統語的に生成されるという立場を採る者は、他にRoberts (1987)、Fellbaum and Zribi-Herts (1989)、Carrier and Randall (1992)、Stroik(1992, 1995, 1999)、Hoekstra and Roberts (1993)等がいる。また、語彙的に生成されるという立場を採る者は、他にHale and Keyser (1987)、Doron and Rappaport Hovav (1991)、Ackema and Schoorlemmer (1994, 1995)等がいる。

11. Hoekstra and Roberts (1993)は、中間構文における暗黙の動作主が非特定の解釈を受けるという事実を説明するために、そしてこの事実と投射原理との整合性を維持するために、この暗黙の動作主が疑似普遍的で任意な(quasi-universal arbitrary)proであると仮定している。そして更に、このproの意味役割が副詞の経験者項との $\theta$ -identificationの下で認可されると主張している。しかし、Ackema and Schoorlemmer (1995)が指摘するように、また、2.5.節で見たように、副詞が中間構文における必須要素でないことを考慮に入れるならば、この主張は支持しがたい。

## 参考文献

- Ackema, Peter and Maaike Schoorlemmer (1994) "The Middle Construction and the Syntax-Semantics Interface," *Lingua* 93, 59-90.
- Ackema, Peter and Maaike Schoorlemmer (1995) "Middles and Nonmovement," *Linguistic Inquiry* 26, 173-197.
- Anderson, Mona (1979) Noun Phrase Structure, Doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Carrier, Jill and Janet H. Randall (1992) "The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives," *Linguistic Inquiry* 23, 173-234.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Curme, George O. (1931) *Syntax*, Heath, Boston.
- Doron, Edit and Malka Rappaport-Hovav (1991) "Affectedness and Externalization," *NELS* 21, 81-94.
- Fagan, Sarah M. B. (1988) "The English Middles," *Linguistic Inquiry* 19, 181-205.
- Fagan, Sarah M. B. (1992) *The Syntax and Semantics of Middle Constructions: A Study with Special Reference to German*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Fellbaum, Christiane (1985) "Adverbs in Agentless Actives and Passives," *CLS* 21, 21-31.
- Fellbaum, Christiane (1986) *On the Middle Construction in English*, Indiana University Linguistic Club, Bloomington.
- Fellbaum, Christiane and Ann Zribi-Herts (1989) *The Middle Construction in French and English*, Indiana University Linguistic Club, Bloomington.
- Fiengo, Robert (1980) *Surface Structure: The Interface of Autonomous Components*, Harvard University Press, Cambridge, MA.
- Fillmore, Charles J. (1968) "The Case for Case," *Universals in Linguistic Theory*, ed. by Bach Emmon and Robert T. Harms, 1-88, Holt, Rinehart and Winston, New York.
- Hale, Kenneth L. and Samuel J. Keyser (1987) "A View from the Middles," *Lexicon Project Working Papers* 10, Center for Cognitive Science, MIT.
- Hoekstra, Teun and Ian Roberts (1993) "Middle Constructions in Dutch and

- English," *Knowledge and Language*, Vol. II: *Lexical and Conceptual Structure*, ed. by Eric Reuland and Werner Abraham, 183-220, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Jespersen, Otto (1927) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part III, *Syntax*, George Allen & Unwin, London.
- Keyser, Samuel Jay. and Thomas Roeper (1984) "On the Middle and Ergative Constructions in English," *Linguistic Inquiry* 15, 381- 416.
- Kusayama, Manabu (1997) "Toward a Unified Account of the English Middle," *Tsukuba English Studies* 16, 247-282, University of Tsukuba.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantic Interface*, MIT Press, Cambridge, MA.
- O' Grady, William D. (1980) "The Derived Intransitive Construction in English," *Lingua* 52, 57-72.
- Rizzi, Luigi (1986) "Null Objects in Italian and the Theory of *pro*," *Linguistic Inquiry* 17, 501-557.
- Roberts, Ian G. (1987) *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*, Foris, Dordrecht.
- Rosta, Andrew (1995) "'How does this sentence interpret?' The Semantics of English Mediopassives," *The Verb in Contemporary English: Theory and Description*, ed. by Bas Aarts and Charles F. Meyer, 123-144, Cambridge University Press, Cambridge.
- Stroik, Thomas (1992) "Middles and Movement," *Linguistic Inquiry* 23, 127-137.
- Stroik, Thomas (1995) "On the Middle Formation: A Reply to ZribiHertz," *Linguistic Inquiry* 26, 165-171.
- Stroik, Thomas (1999) "Middles and Reflexivity," *Linguistic Inquiry* 30, 119-131.
- Taniguchi, Kazumi (1994) "A Cognitive Approach to the English Middle Construction," *English Linguistics* 11, 173-196.
- Tenny, Carol L. (1987) *Grammaticalizing Aspect and Affectedness*, Doctoral dissertation, MIT.
- van Oosten, Jeanne (1977) "Subjects and Agenthood in English," *CLS* 13, 459-71.
- van Oosten, Jeanne (1986) *The Nature of Subjects, Topics and Agents: A Cognitive Explanation*, Indiana University Linguistic Club, Bloomington.

Wilkins, Wendy (1987) "On the Linguistic Function of Event Roles," *BLS* 13, 460-472.

Williams, Edwin (1980) "Predication," *Linguistic Inquiry* 11, 203-238.